京都外科集談会抄録

昭和28年9月例会

(1) 双角子宮の一角及び一側卵巣を内容とする滑脱ヘルニアの一例

久保田信孝

患者は42歳の婦人，20歳の頃より腹圧により左鼠径部に無痛性還納性腫脹を来すを常として居たが約一週間前より同部に疼痛性非還納性腫脹を来し来院．来院時左鼠径靱帯に沿ひ斜走する鶏卵大，境界鮮明，緊満弾性の腫瘤を触れ，此れは還納不能透光性なく又外鼠径輪は全く触知し得ない．即ち病歴よりはヘルニアを疑わしめるが斯る局所所見は寧ろ水腫を考ふべき所見である．然るに全く透光性なき為，念の為に此れに穿刺を行うに暗紫色，陳旧性血液を証明す．其処で出血性女性水腫なる診断の下に入院せしむるに2日後同腫瘤は鶏卵大の索状肥厚の程度に縮小し表面，平滑弾性硬，境界稍々鮮明，圧縮性なく，還納不能なるを以て診断を，外鼠径ヘルニアと訂正，内容は大網か卵巣と考え手術を行うに左右対称的に発育せる畸形双角子宮の左角及び左側血腫様卵巣を内容とする定型的滑脱ヘルニアであつた．又本患者は，産婦人科的診察により腟の畸形を伴つて居た．

(2) 皮下血管腫の一症例

今井敏彦

最近皮下血管腫と断定すべき一症例を経験したので報告する．症例6歳女子．主訴，右大腿部に於ける無痛性腫脹．現症．3歳の時より右大腿部に鳩卵大の無痛性腫脹あるに気付き，次第に大いさを増し現在鶏卵大となるも自発痛，圧痛，なく，稍々中央部に紫赤色瘀色あるのみで，運動障碍，汗分泌異常等無き為放置す．弾力性硬7×5糎，瀰漫性膨隆を認め，皮膚及び底部との癒着は認められない．手術腫瘤摘出術を施行す．広筋膜上，結合織にて被膜様に蔽はれた鶏卵大の腫瘤を摘出，ペニシリン20万単位注入す．組織像．血管多数集り管腔は拡張せるもの多く，概ね管中に赤血球を充し海綿様血管腫の像を呈す．血管壁肥厚し周囲結合織線維増殖あり．術後経過良好全治退院す．皮下血管腫は一般に比較的稀有のもので最近報告例にては之等の皮下血管腫は，皮下血管筋腫，線維腫の像を示し，本例の如きも皮下血管筋腫，線維腫等への移行型或は原型と考へられる．

(3) 廻腸末端炎に対するオーレオマイシンの治効

今井昭和

最近急性虫垂炎に併発したと思われる限局性廻腸炎にオーレオマイシンを与えて効果があつたと思われる一例を経験した．主訴は廻盲部疼痛で昭和28年9月1日入院，術前診断は虫垂炎性膿瘍．右直腹筋外縁切開約5cmにて開腹すると，虫垂炎を合併した廻腸末端炎の所見であつたので虫垂切除術を行う，腹腔にPenicillin 20万単位を注入した．術後2日間37,5°C前後の発熱がつゞいたので，第3日目オーレオマイシン初回500mg以後毎6時250mgを投与した所投与翌日より全く下熱総量4000mgで全治退院した．従来本病の化学療法と云うものはかなり悲観的なものとされて居るが先きの吉川の報告例に続いて本例もオーレオマイシンを用いてかなり効果的であつたと思われる症例である．

(4) 胃ポリープの一例

片岡典正

入院の約2ヶ月前より食後の心窩部鈍痛，嘔吐及持続的の黒色便を来し，母は喉頭癌で，兄は胃癌で死亡と言ふ濃厚な癌性素因を持つ67の婦人の一症例で，局所々見は心窩部全般の軽い抵抗と叩打痛及臍上部に限局せる圧痛を認むる程度，胃液は無酸症，潜血反応陽性，乳酸反応陰性を示し，糞便は潜血反応陽性であつたが，レ線検査で幽門部に拇指頭大の円形の境界鋭利な陰影欠損を証明し胃ポリープと診断し胃切除術を行つた．手術所見はレ線検査で認めた如く，幽門輪より4cm離れた小彎側前壁に示指頭大の柔軟な移動性を僅かに認める腫瘍を証明して，為胃切除術兼後結腸胃腸吻合術を施行す．剔出標本，腫瘍は胃前壁で幽門輪より4cm，小彎より2cmの部に存し1,5cm×1cm×1cmの大いさを有し，短茎を以て茸状となり，先端は浅い溝により2分葉性になり，暗赤色，硬度は柔軟，腫瘍より幽門に至る胃粘膜は皺襞形成を失ひ多数の小豆大の疣状隆起があり胃炎の像を示した．Polypは組織学的に乳嘴性腺腫で一部嚢胞様拡張を認めたが悪性変性は認めない．本症は胃腫瘍中0,5乃至1%に見られる程度であるが，約40～60%の高率で癌に悪性化すると報告されてゐるので，胃ポリープは治療上胃癌と同様に広汎な胃切除術で処置されるべきである．

(5) 流注膿瘍を伴える腸骨淋巴腺結核の一例

土居秀郎

28歳の男子で左腸骨窩に無痛性腫脹を来し，仙骨結核兼左腸骨窩膿瘍の診断の下に加療を続けていたが，8年もの経過を有し乍ら尚レ線像に所見なく之に観血的療法を行い，その原発巣が腸骨淋巴腺である事を確認し得た1例を報告し考察を加えた．

(6) ナイトロミンによるクロイドの一治験例

池内　彰

再発したケロイドに対してナイトロミンの実質内注入を行い効果のあつた症例を報告したが，ケロイドが切除不能の場合，或はケロイド体質の者に対しては相当効果があり一応使用してみる事がよいのではないかと考える．

(7) 後腹膜腔に発生せる神経節腫の一例

林　培夫

患者は5歳の男児で，主訴は腹部腫瘤，現病歴は本年6月初旬上腹部に鈍痛を訴え，ために家族により腫瘤の存在が認められた．腫瘍は左上腹部に小児手拳大の腫瘤として触れ，左肋骨弓と左乳線の交叉部を中心に，上方は肋骨弓内に入り境界不明，内，外側，下方は境界鮮明，表面粗大結節状で弾性硬，呼気により摑み得ず．截痕証明し得ず，アドレナリン試験は陰性，X線により腎，腸と無関係なる事が証明され，後腹膜腔腫瘍として手術が施行された．摘出標本は重さ400瓦，大いさ12×9,5×7,5 cm，表面血管に富む黄白色の実質性腫瘍で，鏡検により神経節腫と診断された．本腫瘍の発生部位は副腎，交感神経系統が大部分ではあるが，後腹膜原発性腫瘍自体が稀で，内皮細胞腫，肉腫の外，脂肪腫，粘液腫等の記載があるが，神経節腫は以上にも増して稀有である．Virchowにより最初に記載され，神経細胞，纖維，膠よりなる良性の腫瘍で幼年者に多い．稀に悪性の事がある．

(8) Sparganiasis Mansoni の1例

原田直彦

岐阜県高山市在住の農夫の左側胸壁の皮下無痛性腫瘤を剔出した所，内部に Diphyllobothrium Mansoni の Plerocercoid が寄生して居た．又高山市内で捕獲した野犬11頭の検便を行なつた所，1頭に本虫卵を証明した．此の点からして，今後も本疾患を発見する可能性があると思われる，

(9) 輸尿管膀胱吻合による輸尿管狭窄の治験例

土屋凉一

患者は35歳の女，膀胱鏡検査逆行性腎盂撮影等の結果，右輸尿管下部に狭窄があり，そのため腎水腫腎盂炎をくりかへし，種々の治療に抵抗してきたと思われる．

之に対し，輸尿管を膀胱近接部で切断し，膀胱壁と輸尿管断端とを，恰も腸管端々吻合の如く比較的簡単に吻合し，良好な成績をおさめた，

輸尿管膀胱吻合術は Davenport が人間に成功して以来，種々の術式があるが，我々の症例についても，今後その経過を観察したい．

(10) Fallot's Tetralogy, Constrictive Pericarditis の手術例

緒方　武

(11) 術後における腹腔内細胞の動態

津田　安

開腹術施行の際 Vinyl-Tube（口径 1mm, 長さ 13 cm）を腹腔内に挿入する方法を案出し之によつて主として虫垂切除術後における腹腔内細胞の動態を44例に就て検索した結果，次の如き結論に到達した．

1) 術後における好中球の反応型式には大別して四つの型が挙げられ且各型と虫垂変化との間には一定の相関関係が認められる．

2) 術後における単球の反応型式には大別して五つの型が挙げられ，且各型と虫垂変化との間には一定の相関関係が認められる．

3) 単球が術後特に増加するのは24～72時間である

4) 単球の形態は，活動期には小型乃至普通型から大喰細胞型に移行して旺盛なる貪喰像を示し，鎮静期に入ると共に非常に小型のものに復帰する．

5) 好酸球は手術当日は極めて低率に於てしか出現しないが，術後7～10日になると28例中18例（64,2%）に於て出現する．好酸球が術後特に増加するのは単球同様24～72時間である．

6) 淋巴球はその出現頻度極めて少く，腹腔内炎症に於てその態度は終始冷淡である．形質細胞の出現も予想外に少い．

7) 漿膜細胞は，早き場合は48～72時間で出現し，通常4日から7日にかけて最も著明に出現する．7～10日頃になると24例中17例（70,8%）に於て出現する．而も形態学的には非常に幼若なものを混ずる．

8) 漿膜細胞は炎症が消褪に赴かねば出現し難い．つまり漿膜細胞乃至巨細胞の出現を以て炎症巣の治癒化傾向をさぐることができる．

9) 腹腔内における癒着問題を追求するには漿膜細胞自体の機能面がもつと闡明されねばならない．

10) 巨細胞は術後7～10日頃になると29例中11例 37.7%）に於て出現し，その構成細胞は漿膜細胞である．

11) 抜糸日前後になると，赤血球の5～6倍大，或はそれ以上の巨大な核を有する巨核細胞が出現し易い．

12) 線維形成は術後7～10日に於て29例中21例（72.4%）に於て認められる．

13) 腹腔内細胞の出現を術後経時的に追求してみると，術後24時間では大部分手術当日と大差がなく，術後48時間では約半数が手術当日と大差なく残り半数が好中球，単球の増多著しく，好酸球も出現から増多へ移行する傾向を示す．又纖維形成がはじまる．術後72～96時間では単球，好中球，好酸球夫々約半数に於て依然増多を示す反面，単球—好中球反応の減弱して行くのも約半数に於て認められる他，漿膜細胞反応が約半数に於て認められ，又線維形成増多が約半数に於て認められる．

14) Vinyl-Tube 挿入法は，腹腔の対異物反応を最少限度に保つ誘導法としても，又抗生物質注入用としても，治療面に利用し得る方法である．